

カトリック行橋小教区：主任司祭 ペリオン・ルイ神父

神の家

*お互いの気持ちを伝える時や、意志を通わせるために、人は「言葉」を使っています。言葉というものは、人と人との間にかけられる橋のようなものですが、時として、言葉は遮る壁にもなってしまいます。同じ言葉を使っているからと言って通じるものは同じであるとは限りません。

＝例えば、「お父さん」という言葉ですが、子どもの時から優しく語り、共に遊び、支えとなり、心から尊敬に値する父親に恵まれたとすれば、「お父さん」という言葉は、感謝の気持ちを呼び起こさせる温かい言葉として響くでしょう。～ところが、その父親は冷たく、だらしない生活をし、酒の勢いで暴言を吐いたり、暴力をふるったりする人だったとすれば、「お父さん」という言葉を聞く時に、怖い、嫌い、場合によって憎いイメージが先に浮かび上がるかもしれません。

＝生まれ育った環境、得た知識や経験したことなどが、言葉の捉え方と理解に大きな影響を及ぼしています。～辞書に載っている言葉の説明は、その言葉の「すべて」を言い尽くしているわけではありません。

*ただ今のコメントは信仰において私たちが使っている言葉にも当てはまることだと思います。同じ言葉を唱えて祈り、同じ言葉を持って信仰を語るからと言って、同じように理解し、解釈しているとは限りません。～一つの例を挙げてみましょう。

*「神の家」という言葉です。

「神の家」。その言葉は「聖堂」を指すためによく用いられる言葉ですが、その言葉

に対する捉え方が唯一ではないのは明らかです。

●「神の家」だから、相應しい楽器はオルガンであり、歌うべき聖歌はグレゴリオ聖歌であると主張する人がいれば、ギターを始め普通の楽器、賛美歌はそれぞれの土地の言葉でもいいはずだと反論する人もいます。

●「神の家」だから、厳重に沈黙を守るべきだと主張する人がいれば、せっかく集まってきたのに～典礼の間を除いて～お互いに挨拶を交わし、声をかけ合ってもいいんじゃないかと反論する人もいます。～このような例をいくらでも並べることが出来ます。すなわちそれぞれの発想と見方の背景に異なった理解と解釈があるということです。

—神の家—



●それは、神が聖堂に「住んでおられる」ことを意味しているのでしょうか。～もし神はそこに「住んでおられる」とすれば、随分寂しい日々を過ごしているでしょう。主日以外に訪れて来る人は何人いるのでしょうか。

●それに、聖堂、その建物が古くなれば壊され新しく建てられます。神はそこに「住んでおられる」とすれば、工事の間どこへ移って行くのでしょうか。

●さらに、「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが人の子には枕する所もない」(マタイ 8、20)とおっしゃったイエスは～たとえご聖体を通してであろうと～屋根と壁の間に閉じ込められることを

ゆる
許して下さるでしょうか。～以上いじょうの皮肉ひにくを
まじ
交えたおかしい問といかけを通とおして言いおう
とすることは、読よんでいる皆みなさんもおわか
りになったことでしょう。「神の家」と呼よば
れる「聖堂」は、神のためにあるのではあ
りません。アテネでの演説えんぜつの中なかでパウロが
の
述べているように「世界せかいとその中ばんぶつの万物を
つく
造られた…神は天地てんちの主しゅですから手てで造
った神しん殿でんなどにはお住すみになりません。」

(使徒言行録 17、24) 聖堂は、私たちの
ためにあるのです。イエス・キリストを信
じる私たちは父なる神によって「呼よび集め
られている」から(“教会きょうかい”だから)その
ための「場ば」が必要ひつようです。イエス・キリス
トの名によって、私たちが集あつまると、初め
てこの「場ば」を「神の家」と呼よぶことがで
きるのです。イエスがおっしゃったように
「二人ふたりまたは三人さんにんが私わたしの名なによって集
まるところには私もその中なかにいる」と。(マ
タイ 18、20)

ちな しようきょうく しゅうどういん
＝因みに小教区たしょうちがの聖堂は修道院つどの聖堂
とは多少違さんかいます。小教区つどの集さんかいに参加す
る人々ひとびとは、赤ん坊あかからお年寄ぼうりまでです。
もじとお かぞく もくそう
文字通り「家族」です。その「家族」に黙想
いえ のぞ ちんもく もと
の家のぞにおけるような沈黙ちんもくを求めることは
イエスが望んでおられることでしょうか。
ある日、イエスに触ふれていただくために
ちの ろ ぐ っ き で し
乳飲ちのみ子ごまで連つれて来きた人々でしは弟子たち
しか し
に叱しかられたところ、イエスは「憤いきどおり」、
でし
弟子たちでしに言いわれた。「子どもたちを私の
ところさまたに来きさせなさい。妨さまたげてはならな
い。神の国はこのようかみな者くにたちの物ものであ
る。」とマルコが書いています。(マルコ
10、13～16) この言葉きもを肝めいに銘きじておく
ひつよう
必要ひつようがあると思います。

＝もちろん、そうだからと言って、聖堂で
おこな てるれい す かって さわ
行おこなわれる典てんれい礼すの間に、好すき勝かって手に騒さわいだ
りはしゃいだり、祈いのる雰ふん囲い気きを妨さまたげたり
していいということにはなりません。しか
しそれは信仰しんこうの問題もんだいである以前いぜんに常識じょうしきの
もんだい
問題ではないでしょうか。

～「神の家」。その言葉ことばは何なにを言いい表あらわそ
うとしているか。それに相ふ応さしい振ふる舞まい
は何か。以上いじょうのこもとに基はんだんづいて判断するこ
とは大切なことではないかと思おもいます。～
いずれにしても、苛いらだ立ちを隠かくせない表情しや
しか まなざ あたた ほほえ
叱しかる冷まなざたい眼差あたたしよりも、暖ほほえかい微笑ふさわみ
の方がはるかに「神の家」に相ふ応さしいものです。
＊「神の家」という言葉は一つの例にすぎ
ません。信じていることを言いい表あらわすため、
信仰を語る時に私たちはたくさんの言葉
を使つかっていますが、その言葉をどこまで、
どのようりかいに理り解かいしているか。語る前ぎろんに議ぎ論
する前たしに、そのこひつようを確たしかめひつようる必要ひつようがある
のかもしれません。

